



大閻記

十六

特別  
リ 5  
12432  
16





15  
12432  
16

大岡祀卷第十六目錄

- 一 吉野之花見事
- 一 高野詣之事
- 一 於大坂所能之事
- 一 利家館所成之事
- 一 呂宋壘之事
- 一 伏見城取之事
- 一 醍醐華見之事
- 一 移ナキ輩將軍日中再反之事
- 一 去依國寄舟之事

大岡祀卷第十六





大岡記卷第十六

小津南菴之在輯録

○吉野花洲見揚之事

文祿三年<sup>甲午</sup>二月廿五日吉野乃花洲流人ありと  
 て大坂と立わさせあり秀吉公例之化也<sup>ヒゲ</sup>頼子<sup>ニエツ</sup>眉作  
 らせ<sup>カチ</sup>鉄<sup>カチ</sup>足<sup>カチ</sup>を<sup>カチ</sup>たり<sup>カチ</sup>傳<sup>カチ</sup>承<sup>カチ</sup>之人<sup>カチ</sup>と<sup>カチ</sup>我<sup>カチ</sup>也<sup>カチ</sup>と<sup>カチ</sup>羨<sup>カチ</sup>慕<sup>カチ</sup>廉<sup>カチ</sup>哉<sup>カチ</sup>  
 盡<sup>カチ</sup>し<sup>カチ</sup>わ<sup>カチ</sup>や<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>出<sup>カチ</sup>立<sup>カチ</sup>ま<sup>カチ</sup>せ<sup>カチ</sup>し<sup>カチ</sup>見<sup>カチ</sup>物<sup>カチ</sup>群<sup>カチ</sup>集<sup>カチ</sup>せ<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>也<sup>カチ</sup>  
 七日紀州<sup>カチ</sup>の<sup>カチ</sup>田<sup>カチ</sup>乃<sup>カチ</sup>橋<sup>カチ</sup>を<sup>カチ</sup>打<sup>カチ</sup>渡<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>市<sup>カチ</sup>之<sup>カチ</sup>坂<sup>カチ</sup>に<sup>カチ</sup>立<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>上<sup>カチ</sup>  
 ら<sup>カチ</sup>せ<sup>カチ</sup>あり<sup>カチ</sup>也<sup>カチ</sup>新<sup>カチ</sup>之<sup>カチ</sup>毛<sup>カチ</sup>を<sup>カチ</sup>大<sup>カチ</sup>和<sup>カチ</sup>中<sup>カチ</sup>納<sup>カチ</sup>云<sup>カチ</sup>秀<sup>カチ</sup>俊<sup>カチ</sup>は<sup>カチ</sup>下<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>立<sup>カチ</sup>  
 ら<sup>カチ</sup>せ<sup>カチ</sup>給<sup>カチ</sup>つ<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>御<sup>カチ</sup>茶<sup>カチ</sup>屋<sup>カチ</sup>あり<sup>カチ</sup>て<sup>カチ</sup>竹<sup>カチ</sup>の<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>守<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>給<sup>カチ</sup>は<sup>カチ</sup>  
 則<sup>カチ</sup>立<sup>カチ</sup>寄<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>せ<sup>カチ</sup>あり<sup>カチ</sup>郷<sup>カチ</sup>食<sup>カチ</sup>膳<sup>カチ</sup>を<sup>カチ</sup>し<sup>カチ</sup>ら<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>ま<sup>カチ</sup>け<sup>カチ</sup>し<sup>カチ</sup>り<sup>カチ</sup>給<sup>カチ</sup>は<sup>カチ</sup>



孝ふまゝに見よしつせう禮をより子本乃楳花園  
楳田わさ乃山がく禮に松をい礼後をて孝吉  
公くそ御ま。

吉野山楳乃るれめいろく  
たとろくまぬる習志行者海濱

又園庵乃るれ此中母く

弟野山惟とむねといなけまこと  
こよひまられ乃かけし屋くらん

園白秀次公

亦くハるれ葛路を習と見りめ

分あぬ山乃喜れそて飛

右大臣晴孝

楳ら本あこれ楳乃りきまき

うわな山城かかぬれなり

中細玄秀俊

ちりよそよまよりや行まき弟野山

花を本けけ乃習とならぬ

実庵乃花を 准三宮道澄

弟野山本此中毎り園正とて

ま信といはたすさし花よ庵とらふ



二位は京言首

御弟野やふれは海言と少り茂こ  
おひもまのまぬあこ此下草

紹巴

あけかのく言とや及るんより一の山  
こころ木まそと花乃何

昌比

ふんせぬれまそとりむより一の山  
ひーえかかふまふあやと

大細言 輝次貞

台言哉まのけそ先て弟野山  
おくれおりよ花さくろと弟

中山大細言 親徳

よくろく言君よひく移くま海一の  
言野の奥乃れをこそ刃色

右邊つ替 永孝

言乃りろもま喜れ極め乃弟野と  
指のま好やと成 結らん

中細言 雅枝

しめ子う袖哉もかせ 弟野山







龍乃上花

志の少くさうけりて  
龍津波下といふたのう  
梢乃花のさうをたうりぬ

神前の花

まゝかた紙神乃めく  
まゝかた紙神乃めく  
し女子の袖うさう  
たうりまゝかた紙神乃めく

花乃祝

圓白考次公

花乃祝

年月々甲子魚一  
花乃末うけし志り  
花乃末うけし志り

不散花風

かゝりてたしり  
花よしとぬ春乃  
みろく内よ花乃

龍乃上花

多那の龍乃花の  
ちりぬやう神や  
うらぬぬとぬのた  
ねまぬまう代乃

神の前花

花乃祝

花乃祝

花乃祝

右大臣晴季

花乃祝

いそり花と又



不敬花風

やーむいはいはくまー備ー  
まのろろぬあはれ積をさそし  
花乃香りりり送るやまうせ

瀧乃上の花

咲つてをよ下り落くき野山  
さぬよせう積く瀧のさう波

神のおれ花

人まらぬさそもや神徳の  
花乃志う甲よあぬさうぬ

花乃祝

うへほく子年乃ける我路りせん  
花を若をぬかけをさうして

積大納を親總

美乃歌

四時にさうろあそいさつまうく  
おのりりれ花のうへへ

花をらうまぬ風

さそりうとかな我路をそもいそあや  
花よみえらうまれ夕う勢

瀧乃上の花

はき野やさぬう花を水乃うよ  
かうて落そよ瀧の志うあそ

神のさう花

まをりんえ大官人乃神あまそ  
神乃りうされ花をりんるぬ

花乃いそひ

後ーうくあぬあよまあまうん  
うれの子年も君うまあく



橙大細之輝夜

花の移る

かけたるさし雲井花よみりの  
しとささるる後てーりれ

石散花風

霞哉し吹くくひくはあやや  
とれよさつぬまの山くせ

籠の上の花

意あましくみおさりたつ籠のどろ  
とれの指はつたさるる舞

神のおれ花

まきハたれ袖ありくくひよも  
花よみりる 神のひるま

花の祝

色も香も整るぬ花よみりる

妻代乃まき哉まきをくく思む

大細之家康

花の移る

まらうぬら花もまき哉影しそ  
咲やまき花のまぬ乃そ

石散花風

咲花を散さしと思ふまき花ハ  
心あふぬまき乃 山風

籠の上の花

花のいろまきより後色まきや  
まきとまきさ嶺のまき枝

神代前の花

年く乃まきの初まきよりの心  
まきとまきまきすまき神代



美乃祝

君が代を子とせのまもる美乃祝  
とれはちまひりりまひりり

権中納言秀保

花の彩

年くよもても心ひこも山花の  
とれは心成る女 男もたすか  
けはたは心成るをほくまうれ

不散花風

美乃の山乃花をゆくを

流の上の花

あどいしつゝ流るん御美乃  
流り流るよ花の志くまこ  
みくせは美乃乃山ハ白妙

流の上の花

花乃祝

花の色こそ流るき乃ら  
天地乃めく人もうを君が代  
美を美きききき

権中納言秀俊

花の彩

山花の花乃さる心成る女  
心をやとろこ思ふりり

不散花風

よりの山乃花をゆくを  
ちくまわ花をゆくを

流の上の花

山とよとれやらるん山花の  
流の志くまひりり



神の薨花

芳野山園の文井よ立はく  
くすん城をぬつうきさり

花乃祝

君う代ハキくくくくくく  
花におせぬ花の 幸風

春儀中納言秀家

花の移心

喜ぶ心になれりきそみく  
舞のいろを待そ道ぬ

不散花風

く世頃と花よハけよき  
我う身りくくくくくく

籠乃上の花

みくくくくくくくくく  
みくくくくくくくく

神のまは花

霧にまらく花のまらく  
植まー神のいうまは花

花乃祝

代とつたなきき花  
白妙よりくくくく  
くく世絶ふともくく

春儀元を中納言

花乃祝

花咲く四段をくくく  
まらくくくくくく

不散花風

くくくくくくくく  
くくくくくくく



花のつら

散華よ花のまはるはまゝりて

花のつら

雪かき炭乃るまそかまら

花のつら

子早花のめくまをひてそ

花のつら

くみりくの 華 枝のりふ

花のつら

花野山花乃さくられ久しきに

花のつら

君よりつらいつらり何しに

花のつら

たは清中物雅枝

不散花風

花のまはるさくらまはるのや

うれまのひまらりてり那

喜風を心何まらるさくらり

花のつら

花のつらをみりてのつら

花のつら

花津津乃るよりみきてき花の

ありまをわぬ花のまはるは

花のまはるりてやき花の山

花のつら

いりまよきまを花のまはる

花のつらを代のまを花のつら

君をそまらん清華野のつら

花のつら

まをるぬ花のつらを

咲え来てんむみりてのつら

おは清中物雅枝



不散花風

山風を吹りてやたゆびく舞  
枝もうこぬ花のさくらと

流のよれ花

水乃花のすゝき枝をのつゝ  
わらや香籠れたたきつあつて

神代節の花

咲花よぬきとり流る神りきや  
古実よかろよまのこや人

舞の祝

花よりて心れくはこしくも  
つさせぬまきよた枝やまこいん舞

侍長政宗

花乃移る心

おあしくはらぬ河りまうせの

不散花風

ちりりて花枝みろり色か  
をくみ花の梢もあやふたり  
枝よあつまぬや吹ら舞

流のよれ花

あせ山流津家よれちまき  
いせきにわか枝そまそよ

神乃前の花

むり誰つるま心若移りあて  
六乃神りまの花枝くあむ

舞の祝

君りたれりの山の枝乃葉  
とまい舞や花のいろやま

准三又道澄



花の移り心

花の移り心はかきりぬのたふしのみ  
よけぬ梅あまのまてのこむ

不散花風

みづのうらやみし花雪  
ちりまぬ舞のせれをとり

籠のとれむ

石より花籠水とまのこりやと  
みづの風乃花若 白岐

神の前は舞

神垣よりとく花えよのうら  
としくたまぬまむあやくら

花乃祝

さくらの花より人乃ゆあまき  
おきあまをせれやとい志あしむ

入道前内大臣常三

花の移り心

年月の移り心もみらぬ善好し  
奥くわくをら花をととれあく

不散花風

おきあまの君りやあつは  
を吹ぬをの花よはるきし

籠の上は舞

ひぬらをやれ事しむらひおて  
袖とそひいと花の籠をり

神の前は花

らむやう神の足まのたむし  
くひそそ新あ花れまういよ

花乃祝

あくまても梅やせり一年くの



喜のたふといはれしたるを

法皇金宗

花の移る

玉らう系我老らくは花もくは  
君らうせれ喜毎よりむ

不散花風

まうをも霞のうら花のりあ  
ちぬいせ忍たり母を忍る

流のよれ花

石くは流津津上落流り流  
むハみうーあてあそをそ

神前花舞

なうく喜のちり母うーは流標を  
たれよみせり神くをあらう

花の祝

ひと喜乃あ枝根う嶺のうれ盛  
あそ急ハさうに十うり花舞

法眼紹巴

花の移る

花よまよハたなまぬま喜毎  
おのひやりあーみうーのう

不散花風

所和山舞れ母ー三はまをいそ  
乃と守をま喜れ風やまうん

流のよれ花

流のともあさかぬれ舞標を  
あれまらうり花の志つけさ

神の前花舞

秋むらあをられさもやまう



花の祝

あはれのつらき花やさくら舞  
くをうつる花の奥は山裾  
花乃さうりハ義代まきり

法眼中已

花の歌

善好山舞の本なら故やあつ  
花乃さうりハ後一やうきや

不散花風

咲花のらうとしんるの御善好の  
山のかややう勢ハくくら舞

就の上花

よりの川らうきよ舞の就は  
花乃さうりハかきまきてそり

神花の花

心なまか人やたやうん花のまを  
みや木まらなりんりーのら

舞乃祝

善野山子せ乃たもまを  
君乃さうりハ花をあらん

法橋昂也

花の移らひあふ海に送來つてもまを

花やまよきもみりーのら

不散花風

善野山子せ乃たもまを  
花乃まわひよあけ海うらん

就乃上花 水上の花咲て子就 法橋昂也



くまの井とつり物と

津の浦に花後ろりん又ししうくにみりま

ひさしあまは花しあうし

花の祝

その上をくちんはひし

御秋の舎れ翌日の上を花を呉たりけし

お葉せぬまは葉この花の色

家海をまてくち代をぬ

大より文のまといく

折よあま今とさうり花のつら

雪井はけく橋本のうや

山松のう勢やぬく

くけは橋のちりし

関白秀治公

ひさしにかうらをを教ハ

あより花の色を

右大臣晴季

父を若しあまを

らう橋あまはさう

は原全宗



らまの文様木代文志花子あま  
 かな紙奥少くまきやたの祈ん  
 上乃薙之文子へ 秀吉公  
 物ももむりよ家柄をへ入るひ是  
 持るそ花のくく見かたりり  
 同 中細き秀俊  
 いそまあなる成くり子あま  
 本のももぬ乃花の白ひり

○高野詣之事

三月之秀吉公なる舟へ河登山より後青巖寺  
 而寧州宿海しして二親も其のたれ焼香い  
 うにも悲しゆは法し冷ひかりりかくて一山八千人乃  
 僧徒は名高の清母堂の志しして八本海し冷  
 又にかり而考の之玉甚い之後奥院へ系路し  
 方々毒苔埋入に方々之塔は安移るもあま  
 又新しく立派に又子之ハ敷るよ在の懐ひ臆然  
 そりあかかしに母を言祈の糸の糸あま何  
 とすし物さひくはあま飛騰之唐始も消定











物と云り詰むぬいして不審なる事なかり。  
又或曰いやたていり終り成付く見ぬ  
は一冊（ウツミ）其意足くは子いりてき智る  
物なり器（ウツミ）の如し賢聖の智ハ。大抵今  
て。欠ふ事なかりしり。

おと坂新編御能事

同日十月十日辰九（ユラエホツケウ）におわく。由已は橋（橋別）

新作の稿（ウツミ）も花見。言野も信。昭智。某日  
小條はぬ敷合と書八郎は仕（シ）疎と少信一と  
と。道とくは御付。とる信と交。とせ治。御能と遊

一。書中ぐく。人を見をま。せりま。しうん。くふ。とく。也。  
ぬ敷の。く。ら。人。言。云。二。書。疎。く。を。さ。す。り。物。を。ま。  
た。ふ。上。と。手。な。り。に。依。く。出。来。一。信。り。と。り。一。疎。  
去。る。御。能。を。せ。く。ま。つ。

福田め原基をくに威と封（ホウ）一。事外は仕疎  
ふ。一。信。り。一。事。曉（サト）一。と。君。子。の。言。  
あ。ま。つ。ま。を。ち。ふ。乃。才。藝。と。と。ま。した。る。故。  
よ。也。喜。難。色。あ。り。一。を。り。ん。く。才。厚。き。  
人。の。何。事。も。め。て。た。さ。物。を。り。身。一。と。え。ら。一  
治。と。と。味。り。け。つ。と。見。え。し。り。心。育。を。り。



人への愛を以てして。印<sup>カッ</sup>を以てして。

さるる下らん。

○利家亭の落成の事

利家親が守利家より進上り所成之令  
にて平宗易が書院之移園を。お譲せし  
事。作事等おひさしく勤めし。日教所  
累り大に所成りし。浅野彈正少弼が來  
卯月八日所成りし。天正十七年二月九  
日所成りし。則ち之旨成せし。多し。此  
の事也。浅野彈正白十日之利家の宿に來

和。意が旨演説を志す。利家亭の落成の旨  
所と同道を。中上ら進上り。卯卯月十日  
所。六百大取上り。所成り。教養院より。毎日  
と。所。式掌之所用にて。意<sup>ジ</sup>照<sup>セウ</sup>院<sup>井</sup>が所成之  
記。福を。教養院の所成り。家系。徳大寺。也。  
ゆへ。所。上。烏帽子。意が。所。列。所。所  
一。所。

初日之進上

- 一 所 古刀 長光
- 一 所 馬 今 覆 襦 袴 等
- 一 所 小 袖 二 百 斤
- 一 所 小 袖 二 拾 内 十 唐 織



一 純子 二十卷

御敵の水軍越中守羽柴肥前守蒲生と陣守。  
加ハ羽柴孫四郎母羽の郎左衛門尉在邊對馬右近之權  
かり。是又東之軍御成之記羅に應じて七巻に御  
武器たびくせりし御酒宴に備へて此真之章  
若公御九段二巻録一後以て御書あり何も  
出集たりと御氣色をりしなり。

翌日九日之遣上

一 御腰物 吉光 一 銀子千枚

一 絹二百疋

利家長臣之面々三十一人古方折紙にて水札の上  
より則ち御書をよみし暁日御校場より還御  
ありしにたり

○秀吉公有馬御湯治之事

卯月廿九日御湯治に付る鷹之の庄佐治の九  
人被召列御針乃りしと云らんかともあり。此還  
為中の方より御物に救ふ事と有馬中人  
有馬自二百疋湯女を小卒共被下。皆中此  
より己のいと同出見えし。が月よりありたり











廻一。賈買此便。いと羨しく。東八所の傍  
ひつ川をうきりく。吾人之歌よ。

ひつ川乃場よまきりく。とく

ちりく。そ花乃さち先ちりけき

とさん辰巳下り引廻一。喜山。磯こと信年波徑

路。去拍生。里たる。と。去河。醍醐寺。七さく

孝寺。映。と。貢と。と。顔。引つ。と。借。新

撰。何。山。も。ち。く。く。く。く。則。新。撰。り。嶽。と。三。傳

つ。ち。り。が。道。く。三。と。云。之。と。後。舟。へ

つ。松。翠。今。と。吟。一。夜。と。く。く。く。く。後。乃。考。と。傳

一。養。大。れ。ち。院。三。十。三。西。乃。唯。礼。礼。哉。の。親。考。堂  
あり。唯。礼。款。と。考。より。

教。を。す。く。月。成。及。む。ら。も。ぬ。り。と

字。治。乃。川。流。よ。ま。い。と。く。く。く。く。波

見。後。せ。八。朝。日。山。を。い。り。と。月。と。一。都。く。川。を。さ。と。一。さ

え。の。さ。ま。い。く。千。名。う。か。こ。と。と。ま。よ。く。り。平

院。解。の。其。塔。之。崎。と。吹。散。字。治。お。ら。か。く。ら。の

卷。を。ま。よ。乃。均。月。少。見。乃。指。月。と。ま。京。と。ま。き

く。ま。り。せ。は。西。八。樓。と。待。拍。河。定。一。口。長。江

ゆ。り。く。と。一。松。乃。上。下。を。浦。波。帆。漁。村。夕。照。と。ま。ぬ



くろの眞府君乃福を信一責と伏見よむらぐ代  
款人よるえとけつ中よ清制家よりつて月文のやを  
西のり

ゆせんと玉乃薨も何さむむ

月のこやこれ新キううこ代

めけ種とさほくろ風京と云屯維乃方角多  
と云城あよおほ一定めけつも又名宣平

評曰めむ多京備り一ちとい芳よりおがた  
けつとけつよよりとさささ出東備りよや  
中治り一けつ大坂今後よちうけつ一けつ

聚樂日中いよとわさる新康もてさうろく治  
てよるとい伏見を城墾よ定めけつ一  
いとけつ一さよも初中後もけつ一  
すり事。終つ河野とへ一及とれぬさあらん  
文禄三年二月初はより廿六万人之恙到せく  
融山種は敷山雲母坂より大石をいおと事  
一伏見よハ城善善よ勢を多と据せけつ一  
ちのふおろりつて見え舞一ふらつたけつ  
中しやともおろりなり。その外材木は本ちり  
ち伏乃死にけつ。大本城伐置けつ。又の年の



夏の洪<sup>コウスイ</sup>ゆまのつら<sup>ツラ</sup>信おぬ<sup>シノ</sup>。疲<sup>ツカ</sup>子<sup>コ</sup>天<sup>テン</sup>公<sup>コウ</sup>も物<sup>モノ</sup>成<sup>ナリ</sup>一  
 ろ<sup>ロ</sup>やと<sup>ツクカハ</sup>疑<sup>ウタガハ</sup>ま<sup>マ</sup>なり<sup>ナリ</sup>。あ<sup>ア</sup>ひ<sup>ヒ</sup>ま<sup>マ</sup>回<sup>マヒ</sup>一<sup>イチ</sup>を<sup>ヲ</sup>仲<sup>ナカ</sup>の<sup>ノ</sup>お<sup>オ</sup>勅<sup>ツク</sup>め<sup>メ</sup>ら<sup>ラ</sup>せ<sup>セ</sup>  
 周<sup>シユ</sup>石<sup>シツ</sup>六<sup>ロク</sup>人<sup>ニン</sup>を<sup>ヲ</sup>の<sup>ノ</sup>加<sup>カ</sup>増<sup>ゾウ</sup>之<sup>シ</sup>地<sup>チ</sup>恩<sup>オン</sup>賜<sup>ミ</sup>を<sup>ヲ</sup>け<sup>ケ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>。侍<sup>シ</sup>  
 周<sup>シユ</sup>と<sup>ト</sup>急<sup>ツク</sup>く<sup>ク</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>も<sup>モ</sup>柳<sup>ヤナギ</sup>芳<sup>ヨシ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>つ<sup>ツ</sup>と<sup>ト</sup>と<sup>ト</sup>ま<sup>マ</sup>ふ<sup>フ</sup>乃<sup>ノ</sup>  
 勅<sup>ツク</sup>悔<sup>クハ</sup>怠<sup>タイ</sup>ま<sup>マ</sup>一<sup>イチ</sup>年<sup>ネン</sup>月<sup>ゲツ</sup>も<sup>モ</sup>累<sup>カサナ</sup>り<sup>リ</sup>身<sup>ミ</sup>を<sup>ヲ</sup>く<sup>ク</sup>石<sup>シツ</sup>柱<sup>チュウ</sup>二<sup>ニ</sup>重<sup>ジュウ</sup>三<sup>サン</sup>  
 重<sup>ジュウ</sup>出<sup>シュツ</sup>ま<sup>マ</sup>げ<sup>ゲ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>。や<sup>ヤ</sup>而<sup>ニ</sup>老<sup>ライ</sup>お<sup>オ</sup>も<sup>モ</sup>を<sup>ヲ</sup>を<sup>ヲ</sup>急<sup>ツク</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>。地<sup>チ</sup>  
 事<sup>ジ</sup>け<sup>ケ</sup>は<sup>ハ</sup>女<sup>メ</sup>の<sup>ノ</sup>急<sup>ツク</sup>な<sup>ナ</sup>り<sup>リ</sup>。下<sup>ゲ</sup>の<sup>ノ</sup>河<sup>カハ</sup>を<sup>ヲ</sup>こ<sup>コ</sup>す<sup>ス</sup>。二十<sup>ニジュウ</sup>夫<sup>フ</sup>よ<sup>ヨ</sup>し<sup>シ</sup>  
 と<sup>ト</sup>瓶<sup>ビン</sup>上<sup>ジョウ</sup>の<sup>ノ</sup>法<sup>ホウ</sup>を<sup>ヲ</sup>植<sup>ウヅ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>。枝<sup>エダ</sup>を<sup>ヲ</sup>急<sup>ツク</sup>く<sup>ク</sup>深<sup>フカイ</sup>く<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>こ<sup>コ</sup>し<sup>シ</sup>。  
 妻<sup>メ</sup>抱<sup>ダ</sup>き<sup>キ</sup>ま<sup>マ</sup>つ<sup>ツ</sup>こ<sup>コ</sup>し<sup>シ</sup>中<sup>ナカ</sup>の<sup>ノ</sup>臺<sup>ダイ</sup>塔<sup>トウ</sup>伽<sup>カ</sup>藍<sup>ラン</sup>と<sup>ト</sup>立<sup>タ</sup>並<sup>ナミ</sup>へ<sup>ヘ</sup>  
 号<sup>ゴウ</sup>字<sup>ジ</sup>文<sup>ブン</sup>所<sup>ショ</sup>古<sup>コ</sup>今<sup>イマ</sup>す<sup>ス</sup>。此<sup>ココ</sup>御<sup>ミ</sup>禱<sup>トウ</sup>人<sup>ニン</sup>あり<sup>リ</sup>。朱<sup>シュ</sup>光<sup>クワウ</sup>古<sup>コ</sup>古<sup>コ</sup>古<sup>コ</sup>

徳<sup>トク</sup>磨<sup>マ</sup>寺<sup>ジ</sup>宗<sup>ソウ</sup>珠<sup>シュ</sup>宗<sup>ソウ</sup>悟<sup>ゴ</sup>紹<sup>ショウ</sup>鳩<sup>コウ</sup>の<sup>ノ</sup>風<sup>フウ</sup>と<sup>ト</sup>千<sup>チ</sup>宗<sup>ソウ</sup>易<sup>イ</sup>山<sup>サン</sup>向<sup>コウ</sup>之<sup>シ</sup>道<sup>ドウ</sup>  
 疎<sup>ソ</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>遊<sup>ユウ</sup>し<sup>シ</sup>。合<sup>カッ</sup>を<sup>ヲ</sup>中<sup>ナカ</sup>の<sup>ノ</sup>豆<sup>マメ</sup>一<sup>イチ</sup>ま<sup>マ</sup>に<sup>ニ</sup>付<sup>ツキ</sup>け<sup>ケ</sup>は<sup>ハ</sup>一<sup>イチ</sup>は<sup>ハ</sup>  
 一<sup>イチ</sup>と<sup>ト</sup>説<sup>セツ</sup>給<sup>キョウ</sup>なり<sup>リ</sup>。山<sup>サン</sup>里<sup>リ</sup>の<sup>ノ</sup>六<sup>ロク</sup>河<sup>カハ</sup>着<sup>チャク</sup>の<sup>ノ</sup>を<sup>ヲ</sup>来<sup>ライ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>。田<sup>テン</sup>登<sup>トウ</sup>ま<sup>マ</sup>と<sup>ト</sup>  
 二<sup>ニ</sup>登<sup>トウ</sup>ま<sup>マ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>。い<sup>イ</sup>す<sup>ス</sup>ま<sup>マ</sup>を<sup>ヲ</sup>ま<sup>マ</sup>げ<sup>ゲ</sup>た<sup>タ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>り<sup>リ</sup>。面<sup>オモテ</sup>を<sup>ヲ</sup>し<sup>シ</sup>り<sup>リ</sup>  
 沸<sup>フキ</sup>茶<sup>チャ</sup>を<sup>ヲ</sup>飲<sup>イン</sup>み<sup>ミ</sup>。茶<sup>チャ</sup>を<sup>ヲ</sup>乃<sup>ノ</sup>講<sup>コウ</sup>人<sup>ニン</sup>浦<sup>ウラ</sup>し<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>り<sup>リ</sup>。因<sup>イン</sup>が<sup>ガ</sup>裡<sup>リ</sup>  
 路<sup>ロ</sup>も<sup>モ</sup>河<sup>カハ</sup>着<sup>チャク</sup>ま<sup>マ</sup>り<sup>リ</sup>。小<sup>コ</sup>舟<sup>フネ</sup>を<sup>ヲ</sup>燒<sup>ヤク</sup>火<sup>カ</sup>を<sup>ヲ</sup>と<sup>ト</sup>相<sup>ソウ</sup>一<sup>イチ</sup>路<sup>ロ</sup>へ<sup>ヘ</sup>。洞<sup>ドウ</sup>衣<sup>イ</sup>  
 吳<sup>ウ</sup>香<sup>コウ</sup>撥<sup>ハツ</sup>當<sup>トウ</sup>て<sup>テ</sup>く<sup>ク</sup>り<sup>リ</sup>。け<sup>ケ</sup>こ<sup>コ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>フ</sup>を<sup>ヲ</sup>定<sup>テイ</sup>ま<sup>マ</sup>し<sup>シ</sup>。後<sup>ゴ</sup>に<sup>ニ</sup>成<sup>ナリ</sup>ぬ<sup>ヌ</sup>















右面治戸女痛爰  
右東大苑大痛爰

○醍醐熱梅ソウカニを多く之を以て示

大津宰相 攝政大臣 増田右衛門尉

右三人とて之を信之と下みたりかりし事あり

左より二お計之

○熱梅の内へお入るる事

中へ御事 中へ式部大輔

右五人とて之を撰之所用人之外一切お入る  
信之を也

御幸しとてのりあひつて一首かくぬ人 秀吉公  
名を之かくけりたるは之を御幸し  
花のひりけりたるは之を御幸し

本食真之人

美代や少や御幸れ 山さくら  
杉よ少雲乃色残之つ  
とぬ人祝しとてしつ

御幸之治事 此の事あり

一番 政事爰 由か播磨守

田中孝之痛



二番 西之丸

本下周防守

三番 松之丸

石河掃部助  
橋本河内守

四番 乙之丸

石田才五郎  
平塚周備守

又番 加加久愛 利家之  
息女

大田和泉守  
河原左衛門尉  
吉田孝俊守

六番 东御方 但利家之  
女中

三ノ宮院おれのくり御成りしてらるの

徳信とくをしやりはりり及又日りしやりつきつお越  
この御事のりお止院と右之所へく將來  
かあり各花やのの辨おとおひたり各男の  
おのひのおまえ矣屋うたり志まくりつきしてたれ  
まう寸とまちしる一つきしり奇し乃若花を  
の花園をまて道乃左右小辨成を一お父の院子  
のまんまくやらら秀吉公父子まお上之勝宗か  
らいくいとまつたらまさ備人召の任家まハ  
何くまぬにやとおもりて整たり林麻子を  
南ら乃精守たらとくおまひてウりたまの精橋







上ちり下のくも宗屋うたうらみえあるは  
日とらの端下だそ入すくねとく縁ここれれも  
うく花と戯き山よ四やと向り懸あし心  
若ららまきまよあそみえよけ也

仙洞よもろく風とく一ぬもとんまも国をり  
花をみうく舞とて。在橋中納まも物使ははく  
さまーくは折家高し清花ののくくし。まどく  
く使ままりせくまこより。清使よあぬ橋候  
大史。再東隊の鷹くとり折作物地盡其  
負若酒よハ加久れ菊依庭地はま天那平好

赤い乃傍酒尾の道。鬼湯情多し煉江川酒  
持まり院内よ充て院外よ澄みくろ。寔は門前  
市をさすといひやこくもろ屋うの事者て俗  
云物多るやと思われくろ。若下熟平うたう  
よ松板の太本。推捨れ起本敷中本茂りあつて日  
新と知ぬ地を。新産報汝是と奇なりと板の  
つ。茶屋と建至物まひく茶自具まよ心茶  
と上まりぬ。若下一入よ真一もよ。三番よ小川  
ち依守茶屋と営く。是ハ前乃あ人よ事替て  
手のおりたる事よも志ゆると。三回世問は何



まいさぎやうきして垣いよやあうまひこ地んぞと  
 うたうき城あきさ候一幕毎向とあまごあま  
 置くら。まふ人仲方よいついあたく作うませう  
 名うさうけ壹まーうあまひ茶屋しんおゆよ  
 茶具あり兵湯を補んたれとんまつらよあま下  
 げあまあうーあうーゆーてらう坊の上まあやつり  
 名名人とま若川ふたのあまくまの同流と置  
 命とまひつて名を慰ら給ま秀吉云小川う倫を  
 まままてらう仲分ありと感一あま。ち先ち茶屋  
 いら十五六町も上には岩渚乃使あうおああり増

田右衛門尉あまふ茶屋とあうーい候一てお又子の  
 沖在る政ああ乃新館向くのあり一あれり水石  
 あまごあうーてくら。や午はよ及ひーんあ  
 下もあゆおせまや折やほりーあてあ将家  
 脱あうく。あ湯をのせつてあ靴をなかりあう  
 もあうくと湯とゆーあひてたあ膳と上ま  
 ーあまひよけよんまて増田あひあうあま  
 ーあまさりーあうあひーあひつてああ向  
 さい所屋身。南賣の物とんまて。ひまてらうこ  
 挿針<sup>タタウカニ</sup>糸<sup>キヌイト</sup>系やれ物かり。まあ裏屋う



善悪成りしつりよとて多しつ道具と畢命  
此心のあがり書院子義裁之子昂く善蹟  
和等ハ物の三蹟<sup>セキ</sup>り歎書山谷<sup>タカ</sup>り祝と心よりや  
まーるる吉ふ亭し心まよれとくまはひぬ  
東まらるる言とん屋<sup>イ</sup>後く紅の糸ともひくた  
く向くくちちた網を泳く川く鈴とあまこ  
あよは書裁よあひまらるるをとりけりよ善裁  
善蹟<sup>セキ</sup>たは乃教<sup>キョウ</sup>なり

まのいをしつりよ付よ花の終とめん云  
五しりりよおり合せまらくは御感を又中

将秀<sup>シウ</sup>粧つるの対のたき庭の遣<sup>シ</sup>れよお舟と作り  
人形とのせ器よあゆりおくらさあつりわろ祈ハ  
唯人か疑よりり又菓<sup>クワ</sup>意と作り餅乞のあま  
を叫どり久わろ祈をくわいけふこまらく地や  
と思われぬおま<sup>マ</sup>屋うのあやけり地おくらとけし  
し酒林乃の氣<sup>キ</sup>嬌るゆかおそよらけり大妻<sup>オホメ</sup>徳  
善院<sup>ゼンイン</sup>まひいそくさ式のわり屋こ言こまらり  
ぬづりよ大屋<sup>オホヤ</sup>にち祈乃よさそをむことせり  
秀者<sup>シウジャ</sup>云まよせまらて折をしよりあひつてきり  
終上











三十一  
まゆあひたり。今度あつた三寶院の  
波まよのつらなり。殊勝シユセウのまよ。新  
知子カサ百名寄附。治。五日。二十村。初  
村カサ。村小。村。村。秋。又。ふ。葉。の。境。  
あ。え。と。即。終。深。ま。し。く。て。還。沛。ふ。り。や。り。  
翌日。日。日。日。の。醜。醜。之。ち。く。し。ん。か。く。し。く。再。今  
な。市。供。の。人。く。治。ま。八。情。は。穀。の。宅。客。の。宅。  
寺院。を。く。し。方。し。り。の。推。也。と。か。ら。治。伏。見  
ち。後。く。善。信。の。へ。し。酒。肴。且。賜。ま。く。治。勞。役  
報。治。り。き。

評曰し。花見之。事。二月。十日。又。日。た。く。し。  
と。通。く。の。由。定。り。く。ま。し。は。上。旬。の。治。り  
風。あ。ま。ま。く。治。り。く。く。く。く。延。治。見  
る。の。さ。り。く。に。く。ま。し。は。十四。日。之  
善。信。の。治。り。晴。よ。治。り。十六。日。乃。晴。天。ま。て  
を。深。よ。ま。り。く。午。前。より。ぬ。ま。く。ら。つ。く。せ。る  
は。ま。て。あ。の。か。ら。る。の。か。ら。り。く。ま。り。善。信。云  
乃。遠。天。感。の。及。ぬ。ま。く。事。ハ。治。り。も。あ。ら。し。く。  
し。治。り。く。天。か。く。く。し。治。り。和。泉。寺。記。り。き。  
し。事。ハ。天。か。く。く。治。り。感。り。ま。り。治。り。記。



ゆりぬ。

遊撃軍將軍日中再渡之事

大的正使冬將謝用樟竟若副使遊擊將軍宮  
 愚兩人小西持津了田和少く八月晦に至る後美岸  
 也一人正使ハ羽柴俊前中洲云秀家可少く  
 此是也ハ副使ハ蜂須賀何は少く行て多てか  
 一とさり九月朔日御礼申上片大晦之夜  
 帝ト御所侍者東紅量衣故袖紫緋之口秋  
 翰書

生物

孔雀

麝香

白象

黑象



馬

唐大

織物

金欄 百疋

倭子 日

淺石

錦 五十疋

濡子 二百疋

早後 二百疋

虎皮 三十枚

豹皮 日

唐草 日

麩皮 日

狸皮 日

大のく使使病も中城まての列ハ唐の衣  
 物にのり蓋やきー掛きー坐坐坐坐坐坐坐  
 鞍まの鳴物みく幢もささくありーや  
 子登おにー中野西に郷食膳冷中茶

る作りそ御賜く河永昔さやま中礼取けく  
 ろひまに多ううち候と立依見とさしてうけ  
 に午の刻もと取そからおさる平方にゆりぬ  
 歩積ま大取をう依く還るー五日の日伏  
 尺上表六日御城へ移る亭一郷食膳下立後  
 夜身へめを後げり重貝の刻橋をうりけぬハ  
 候こにー金銀堂をまよふ種くの洞を物と  
 の屏風帆帳中座おのり事さ船さう洞と雖  
 及と感ーより物てわりのせ給一燭すうりも  
 やと少里一物一冷一器田た也格造を亭と











河津島子小を被下いへりとも一やまを我  
部より火向湯橋タルサカチ有十五若白米中儀見  
賜ありかくて馬舟一番船二十艘付をヨク  
日十日増田右衛尉方人花羽檄シホヤシを旨りし  
將軍事外たり御様極めくそをけつら右衛門  
尉とよむ政之とんと被付へるや船  
高くとりしりせむ後義船一舟の大きや大  
よこせのまはる事三十舟横ヨコ廿二舟より  
楫カキのへり宮の廣さし立登布テウシキハ帆ハの極まりん  
の真櫃シロバシラハ風のたふし切打キリとより船をたる正三

くいよ金もやかくて船中を改りしとま一  
廻マシの者さ一か是を極くゆたし結つと六  
十日も河津入し金積入し時めけたり  
いそそま時の積り記とわつけは増田江を  
旨どぬささか一さ者の云けつハ積り記と  
私物にかあまの積り物多くま一とより  
中島園くははなと面々人志とく一と事  
たるとる入るのさ一わと白ダカシ腰ウシせし  
わぐやうをりしを白ハはなと徳取え親館ウチ  
子ゆくは是船の一艘ハ帆ハの少なり











久しに首<sup>ニ</sup>披<sup>ヒ</sup>露<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>交<sup>ハ</sup>白<sup>ク</sup>米<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>二<sup>百</sup>七<sup>十</sup>石  
二千<sup>石</sup>酒<sup>大</sup>樽<sup>百</sup>種<sup>ノ</sup>の<sup>青</sup>五<sup>十</sup>荷<sup>能</sup>能<sup>ク</sup>移<sup>五</sup>百<sup>石</sup>  
て<sup>之</sup>下<sup>ニ</sup>初<sup>ニ</sup>旨<sup>ヲ</sup>作<sup>ル</sup>か<sup>し</sup>り<sup>し</sup>増<sup>四</sup>樽<sup>也</sup>也<sup>也</sup>早<sup>速</sup>お<sup>酒</sup>  
酒<sup>一</sup>樽<sup>六</sup>事<sup>外</sup>系<sup>存</sup>知<sup>セ</sup>し<sup>越</sup>し<sup>上</sup>三<sup>月</sup>初<sup>旬</sup>  
海<sup>羽</sup>子<sup>赴</sup>き<sup>に</sup>り



